水を求めて

奈良県　天理市立福住中学校
一年　前出　亜由美

「ヨーヤサイ」
と福住の町をおみこしで歩く。私の住んでいる町には、一年に一度、豊作に感謝する祭り「秋まつり」がある。氷室神社では、氷の神に豊作を感謝する。昔はお米をたくさんとれなかったため、人々は豊作にとても感謝した。

それよりずっと昔、弥生時代には、田んぼで使う水で争っていた。それほど人々は、水を求めていた。水がなければ、のどがかわくし何も作れず、食べ物もない。そんな状況にならないため、争いが起きていた。「そんな話、大昔のことやろ。」と思っていた私は、祖母の話を聞いてびっくりした。祖母が小さい頃、五月ごろになると田植えをし、田んぼに水をはっていた。しかし、川の水も少なく田んぼ一面に水をはるのには、時間が必要だった。

だから、水路を板でふさぎ、水がたまるようにしていた。どの家でも水に困り、そうしていた。

「明日には、絶対水がたまるぞ。」
と安心してねむった。でも次の日、田んぼには、水が満タンになっていなかった。
「やられた」
というのは、水が回ってこない家の人が水路をふさいであった板をとり、水が回ってくるようにしたため、水が満タンにならなかったのだ。それからは、夜に見回りをした。しかし、はずされ、ふさいでのいたちごっこが続いた。

秋になると田んぼの水は、少量でよくなり、そんなトラブルはなくなった。田んぼには大量の水を使う。そのことで人々が争っていたのは、事実だ。びっくりした私は、お米をつくる大変さとともに水の大切さを知った気がした。

私の家は、祖母や祖父。そして、九十三才になるひいおばあちゃんがいる。だから昔の話をよく聞く。家はだいだい農家で畑、田んぼを作っている。

「水はきれいやったぞ。川で泳ぎながら水を飲んでん。」
と祖母。でも、ひいおばあちゃんは、
「でも、水は人の命を取る。」
と言う。ひいおばあちゃんのもう1人の子は池で命を落とした。三才のときだ。水は変ぼうし、人から恐れられるものとなる。東日本大震災のときの津波もそうだ。自然のことだから止めることは、できない。しかし、被害を少なくすることは、できるだろう。

昔は牛を使って田植えなどをしていた。今は、機械で田

植えから何もかもしている。時代が変わり、開発が進んだからだ。でも、昔、水がほしく困っていた。今でも、水は、大切だ。しかし、水道の蛇口をひねるといつでも水は、出てくる。それが日本では、あたりまえになっている。それは、よいことだが、「いつでも水がある。」と思っていると水を出しっぱなしにしたりなどの無駄使いをする。

現在の私の地域では、渇水になったことがない。だから、水がない時のことを考えたことがない。そういう人は、この世の中多いのではないだろうか。牛の役割を機械がやったように水の役割を違う物がする。それは、現在、全く不可能だ。昔のように水で争いが起こらないように水にちょっとでも、関心を持ち、無駄使いせず水の大切さを知ることが必要だ。

日本には水がたくさんある。しかし、世界の人口の十三パーセントのもの人が安全な飲み水を飲めていない。それなのに、日本が水を無駄使いしたり、汚したりする。十三パーセントの人が知ったらどう思うだろうか。一人一人ができることをし、水が豊かでも、無駄使いせず、きれいな水があり続けられるようにしないといけないと私は、思う。